

II-389 多段槽型スラッジベッド及加温による高率脱窒 (I)
— 及加温内基質濃度70°C-1Lと予測 —

長岡技術科学大学 正 桃井 清至
正 原田 秀樹
住宅・都市整備公団 正 口高橋 駿

1 はじめに；本研究では、高濃度生物維持による高率脱窒率及充氮量として、多段槽型上向流スラッジベッド及加温を開發し、その液体混合特性を記述するモデルを提示し、3段バーラメータ槽による内部操作因子の影響を基質化した。また、自ら実験より、上述モデルの組成及び充氮量を評価した。さらに、本及加温は基質濃度分布および非定常状態での基質流出端の基質濃度変化、予測値と実測値を比較することとした。本モデルの適合性を確認したので報告する。

2 実験装置および方法；図-1に実験装置の概要を示す。及加温は高さ100cm、内径10cm、及加温容積7.06l²、底部より多孔板（直径10cm、孔径6mm×25個、開孔率9%）が8枚10cm間隔に設置され、多段槽化されており、各槽は攪拌羽根（25rpm）によって連続攪拌されている。高さ85cmの位置に逆ロート式の洗浄器が設置され、汚泥とガスの分離・沈降とガス捕集が行なわれている。基質は塩素液としてNaNO₃、有機炭素源としてCH₃OHが用いられ、(CH₃OH/NO₃-N)比は3で組成し、さらに無機塩類とリン酸緩衝液を添加した。また、及加温は20°C初期恒温室内設置した。表-1は基質又は非基質（25, 70°C变化）実験の流入基質線速度（水理学的滞留時間）と流入基質濃度の条件を示す。

3 実験結果と考察；及加温内の液体混合特性をよくする汎用高H_B(cm)、流入線速度u(cm/min)、ガス生成速度G(g/h)の影響を θ （1+ r ）パルス充填実験より検討した。混合パターンを記述するモデルとして、軸方向分散モデルを適用し、さらに循環流バーラメータ法や溶液充填物の効果を考慮に入れたもので、図-2のような循環流あるモデル式(1)を提示した。

$$\frac{D}{(1+r)u} \frac{\partial^2 C}{\partial z^2} - \frac{\partial C}{\partial z} - \left(\frac{L \cdot k \cdot x}{(1+r)u S_0} \right) = \frac{\partial C}{\partial t} \quad (1)$$

$z = l$ 、 $C = \text{無次元基質濃度} (\%)$ 、 $x = \text{無次元軸方向距離} (\%)$ 、 $\theta = \text{無次元時間} (= \frac{t}{L})$ 、 $k = \frac{1}{(1+r)u}$ 、 $D = \text{混合拡散係数} (cm^2/min)$ 、 $u = \text{線速度} (cm/min)$ 、 $r = \text{循環比} (-)$ 、 $L = \text{及加温長} (cm)$ である。式(1)式中の C は及加温内、及ガス比脱窒速度(mg NO₃/g ss min)

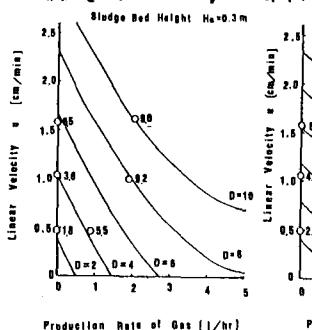


図-3 混合拡散係数Dによるガス生成速度G、線速度u、汎用高H_Bの影響

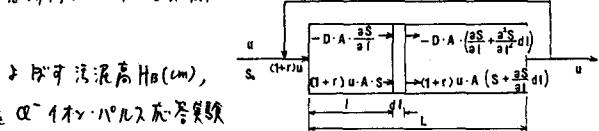


図-1 実験装置概要図

図-2. 流体混合モデル

表-1. 実験条件

| Exp. run No. | Linear Velocity u (cm/min) | Influent Substrate Concentration S_0 (mg NO ₃ -N/l) |
|--------------|-------------------------------|--|
| 1 | 1.53 | 848 |
| 2 | 1.53 | 1628 |
| 3 | 1.07 | 1031 |
| 4 | 2.18 | 1013 |
| 5 | 1.07 → 2.18 | 1031 → 1013 |
| 6 | 1.53 | 810 → 1620 |
| 7 | 1.07 → 2.16 | 2102 → 1055 |

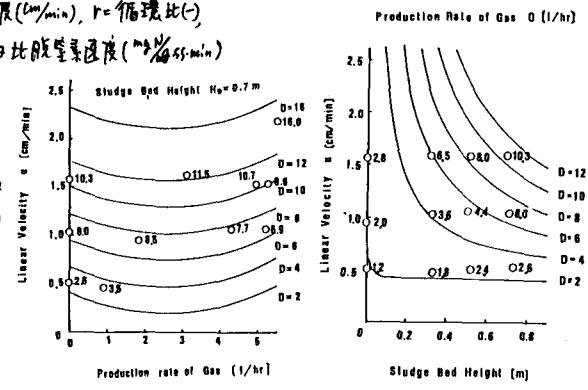


図-4. 混合拡散係数Dによるガス生成率の影響

X は生物濃度 (mg/l), S_0 は流入基質濃度 (mg-N/l) である。混合伝熱係数 α より循環比 r は、汚泥高 H_B 、線速度 U 、ガス生成速度 G の 3 つを説明変数の関数で表わすとしたものと仮定して、重回帰変数選択を行なった結果、次式を得た。

$$D = 3.59 G - 4.21 H_B - 0.224 G^2 - 3.49 G \cdot H_B + 10.47 U \cdot H_B + 1.97 \quad (2) \quad (\text{R}^2 = 0.70, \text{ 置換率 } 95\%)$$

$$r = 0.27 G + 0.49 H_B - 0.38 G \cdot H_B - 0.212 \quad (3) \quad (\text{R}^2 = 0.70, \text{ 置換率 } 70\%)$$

図-3, 4 に伝熱係数 α の実測値を 700 cm の横に示した。図中実線は (2) 式による回帰等高線である。これは、線速度 U 一定の場合、ガス生成速度 G が増加するとともに、增加するが、その依存性は H_B (汚泥高) が増加するにつれて、小さくなる傾向を示している。また、汚泥高 H_B 、ガス生成速度 G が一定の場合、線速度 U とともに増加するところが認められた。循環比 r は、汚泥高 H_B とガス生成速度 G の関数であるが、 G の影響が複雑で回帰等高線が複雑である。 $G = 0$ の場合には、図-5 にみられるように、 r は H_B と線形的に依存し、置換率も $94\% \sim 7\%$ であった。これは、汚泥高 H_B の増加が反応器実験槽内では充満時間帯を減少させたためと考えられる。次に、(1) 式中の比脱塩速度 k の基質濃度依存性を検討したところ、反応器内汚泥ペレットをモジニア化したものを用いて、 20°C にて回分実験を行なった結果を図-6 に示す。比脱塩速度 k は、高濃度側 (図-8) の生物濃度 700 mg-N/l における Michaelis-Menten 型を示し、図中に非線形最小二乗法より決定したパラメータを記した ((4) 式)。図-7 は RUN 1 ~ 4 の反応器内温度 70°C 方向基質濃度 700 mg-N/l の実測値を示したものである。各 RUN の反応器内生物濃度 700 mg-N/l を斜線上に示す。また、図-9 は、各段階の温度 70°C である。流入温度と反応器外周温度は 20°C に維持されていなかったかららず、反応器内は高濃度生物による活性硝酸酵解呼吸による生成熱のために、上段階を下くにつれて、温度上昇がみとめられる。 (1) 式中の比脱塩速度 k 、基質濃度とともに、温度 T の指数 β とあるので、同一基質組成で驯養した生物をモジニア化したものを用いて回分実験より求めた温度依存性 ((5) 式) を用いた。

$$k_T = k_{T_0} \theta^{(T-T_0)} = k_{T_0} (1.10)^{(T-20)} \quad (5)$$

図-7 の実線は、(1) 式を用いて計算した予測 700 mg-N/l である。各段階荷 700 mg-N/l の高率物理を計算してある。図-10 は RUN

5~7 の流入基質濃度 700 mg-N/l は線速度 9.8 cm/s の変化後、残存基質濃度の経時変化を示したものである。図-10 の実線は、(1) 式の比脱塩速度が大、(4) 式、(5) 式の基質濃度依存性、温度依存性を組み込んで計算して予測した値である。

各 RUN とも、実測値と予測値が比較的大きく一致しており、反応器の性能評価上、(1) 式のモデルが有効であると考えられる。 ただし、本研究は科研費奨励研究(A)の補助を一部受けた。

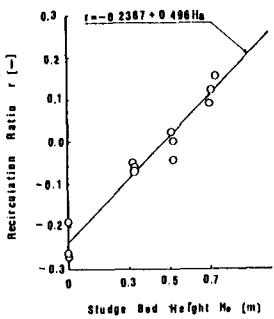


図-5. 循環比 r と汚泥高 H_B の関係

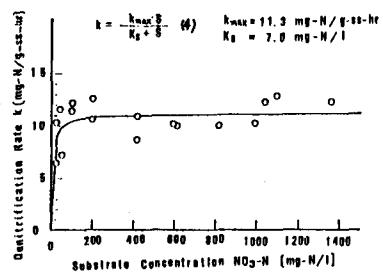


図-6. 比脱塩速度 k の基質濃度依存性

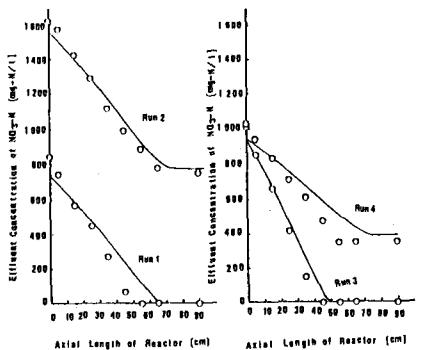
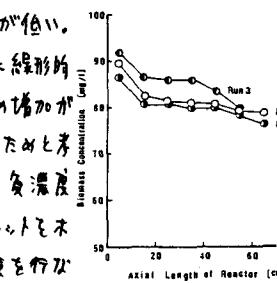


図-7. 反応器軸方向基質濃度 700 mg-N/l

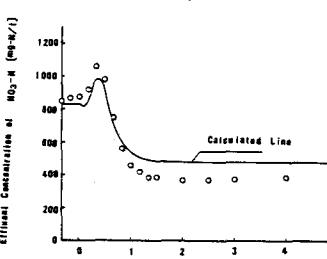


図-8. 非定常出口基質濃度 (RUN 7)

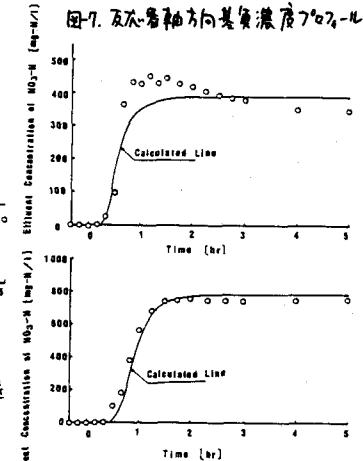


図-9. 非定常出口基質濃度 (RUN 5, 6)